

ハザン省日越友好植林事業

JVPF 会報別冊 4 号
2025年1月18日
日中友好会館助成事業(第三国)

～日本とベトナムの友好の架け橋事業の終了～

ベトナム北部ハザン市フオンドー社のクオイミー村（第一期）、ター（Tha）村（第二期）と実施してきたこのプロジェクトは第三期まで予定されていましたが、日本政府の助成金事業打ち切りにより第三期が実施不可となりました。小さな事業でしたが、これまでの事業が日越友好活動への一滴になったら幸いです。植林作業ボランティア参加や技術指導での参加でご協力いただいた方々に感謝と御礼を申し上げます。



上：クウオイ村で実施された第一期事業地（2023 年 1 月植栽）の樹種トウシキミの 2 年目の模様（2025/11/5）
下：ター村で実施された第二期事業地（2024 年 1 月植栽）の樹種シナモンの模様（2025/11/5）



・ベトナムは、南シナ海に面したインドシナ半島東部に位置し、南北に細長い国で、気候は温帯から熱帯にまたがり、降水量が多く、地形も起伏に富み、この結果非常に多様な森林が分布している。

・現在「2021 年～2025 年を期間とする、10 億本植林プロジェクト」が地球温暖化防止や災害対策などの目的で提唱され、自然環境の維持のため国土における森林面積を 42%で維持していくことが目指されている。同時に「10 億本植林プロジェクト」は林業や木材加工業によるベトナム経済の活性化によってベトナム社会の発展に寄与することが期待されている。

・JVPF のプロジェクトは「日中友好会館助成事業(第三国)」の 2022 年度からの助成を得て開始され 2023 年に第一期5ha(スターアニス、10,000 本)を植栽、2024 年に第二期 3.5ha(シナモン、10,500 本)を植栽してきました。第三期は一期とのセット計画されていたものでしたが残念な仕儀となりました。

・今回のプロジェクトが友好の“一滴”になったことを祈念したいと思います。



日越緑の架け橋

NPO 法人日本ベトナム平和友好連絡会議（JVPF）

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 316 菊地ハイツ 101

TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079

本会報は事業主催（JVPF）の植林プロジェクト特集号です。

2024年ハザン植林技術者視察団概要報告

「農民に思いを寄せ、トウシキミ、シナモンが、たわわに実を付け、 日本とベトナムの平和・友好を願う」

視察期間－2024年11月3日～8日

杉村政彦(森林労連)/ 元林野庁北海道森林管理局上川南部森林管理署 首席森林官
現北海道占冠村役場農林課林業振興室長

田島浩二(林野労組)/ 林野庁北海道森林管理局網走南部森林管理署 行政専門員



事業第一期・クオイミー部落の住民たちと

2024年10月1日(火) ZOOM会議

視察団の鎌田篤則日本ベトナム平和友好連絡会議副理事長(東京都)、杉村政彦(北海道占冠村)、田島浩二(北海道清里町)の3名をオンライン(ZOOM)でむすびプロジェクト概要説明、渡航手続き及び注意事項の確認、意見交換などの事前打合せを行う。

○ベトナムは1940年代以降、戦争による破壊や戦後復興のための資材調達による過剰伐採や農地転換により森林が著しく減少した。そのため、ベトナム政府は「10億本植林プロジェクト」を政策として実施。本プロジェクトは、そこに合致した取り組みである。

さらに今年は、1975年4月の南部解放・統一50年の節目を来年に迎えるという年で(昨年は日本とベトナム外交関係樹立50周年)、本プロジェクトを含めた様々な活動を通じて、平和と友好、連帯を前進させたい。

○第一期1年目の事業については、2023年7月の植林技術者視察以降、8月までの間で地拵、9月にトウシキミ苗の植付け、10月から11月の期間で補植及び野生鳥獣防護柵を設置した。2年目の事業では2024年5月3日から12日まで、フォンドー社の現地農民と林業局でトウシキミ植栽地5haの手入れ(下草刈りなど)、安全確保及び森林火災の防止対策を行ったと、カウンターパートであるハザン省外務局から報告を受けている。

○2024年の第二期事業では、当初予定が変更されている。爆発物残存や事業予定地の傾斜が植付け作業に適さないなどの理由により、事業地面積が6haから3.5haに変更されている。あわせて現地農民の希望により、苗木(樹種)の変更、トウシキミから“シナモン”へ植栽樹種の変更が了承されている旨の報告がされる。

○今年4月26日、ハザン省にて森林火災(酷暑による自然発火と思われる)が発生。林業局をはじめ

住民、軍など1千名以上を動員し、27日に鎮火を確認した。痛ましい事に、消火活動に従事した森林保護局の40歳代の2名の職員が殉職している。○視察時の11月は、乾季のはしりであるが、現地は標高が高いことから長袖の服装が必要。作業道などは敷砂利がされておらず土が露出しており、傾斜のため足元が滑ることから注意を要するなど、鎌田副理事長より説明を受けた。

以上の概要説明と経過報告を踏まえ意見交換を行い、前年度と同様の箇所で生長量調査を行うことを確認し、必要最小限の道具を持参することとした。また、農林水産省林野庁等の職員で組織する全国林野関連労働組合より関係資料が提供されていることから各自参照しておくことを申し合わせた。

提供資料

「ベトナムの森林・林業の概要」「ベトナムの林業行政の動向」やJICA(国際協力機構)によるベトナムの国土・森林の特徴や林産業の動向を知るうえで貴重な資料提供を受けた。この場を借りてお礼申し上げます。

11月3日(日) 現地へ向かう

羽田空港国際線ターミナルに鎌田篤則副理事長、通訳のチャン・チ・ツエット、杉村政彦、田島浩二が集合。空港内で昼食を取りながら最終打合せを行う。11月8日までの日程及び活動内容を再確認する。

また、新たに(公財)日中友好会館より「日中植林・植樹国際連帯事業アンケート」の取組み要請がされていることが報告され、その内容や意義を全体で共有した。

羽田空港16時35分発ベトナムエアライン384便に搭乗し、ノイバイ国際空港に20時10分到着。入国手続き後に、ベトナム・ドンに両替しホテルに投宿した。

11月4日(月)

7時30分、320km離れたハザン市に向けワゴン車にて出発。

15時50分から約1時間程度、カウンターパートであるハザン省森林保護局とプロジェクトの成功に向けての事前技術会議を行う。相手方はディン・スアン・ルーン副局長他3名。

第二期プロジェクトの遂行状況の報告として、

- ・生育状況に問題はない。但し、今年は雨量が多く、下草が例年以上に旺盛に繁茂している。
- ・年間2回の下草刈りが標準であるが、上記のため回数を増やし、3回にわたり刈払った。(地元農民が第一期、第二期の事業地での下草刈りの模様がスマートフォンに録画され、動画として映し出された)

その後、第二期のシナモン植栽後の補植の在り方について意見交換をすると共に、報告資料によって植栽総本数の相違があることから確認をしてもらうこととなった。

また、前日の空港での打合せにもとづき、日中友好会館より「日中植林・植樹国際連帯事業アンケート」の取組みが要請されており、その旨を伝える。既に、カウンターパートであるハザン省外務局にメールをしてはあるが、現地農民を対象としたアンケートであることから、農民に一番近い林業局にも手交し協力を願った。

11月5日(火)

8時30分、ハザン市内のホテルを出発し、外務局・林業局と共に第一期事業地であるフオンドー社クオイミー村へ向かう。

「クオイミー村は薬草植物の栽培と観光村をめざす」と自治体境の門にしるされていた。確かに1年前にはなかったカフェを併設したレストハウスが完成していた。

現地では地元農民(ザオ族)も合流し、意見交換を楽しんだ。案内と説明はザオ族の責任者で、自称「植林部長」の男性にお願いした。植栽とその後の保育管理を行っているクオイミー村28世帯の代表格とお見受けした。

「トウシキミ(八角)は2年目で樹高が110cmから140cmの間に生長している。植栽時の苗木の大きさが40cm程度だったので3倍以上に生長している」あと7年～8年で果実(八角)を付けるだろう」と今後の見通しが語られた。

ハザン省日越友好植林事業に参加して

林野労組 田島 浩二

(北海道森林管理局・網走南部森林管理署)

シンチャオ(こんにちは)

今回、ハザン省日越友好植林事業の実施状況調査団に参加させていただきました。初めてのベトナムの地、出かける前から興味津々でした。まず羽田空港から始まり日本を出国する人々が自分たちのキャリアの他にたくさんの段ボール箱を持ち帰る様や、待ち時間で明るく知人たちと話す姿など初めて訪れる地はどんなところなのだろうと…。

さて、空港を旅立ちハノイへ、翌日ハノイからハザンへ。この日、ハザン省森林保護局との事前技術会議では、計画段階での植栽本数と実際に植えられた本数に差があり、その差をどう埋めるのかの問いに対して、予定より少ない分は「補植」として計画分の植樹は見込めるとの回答で、翌日の現地調査で確認することとなりました。

翌日朝から第一期の事業地へ。現地は標高 600mほどの山間地でスターアニス(八角)が植林された箇所で見地の農民たちとの懇談を兼ねて生育状況の調査を行いました。

現地は温帯という事もあり、コメの 2 毛作の後野菜の栽培などの時期でした。植樹 2 年目の八角は順調に成長し、この年も保育としての下草刈りが 3 回実施(通常は 2 回程度だが今年は雨が多く 3 回になったようだ)され、その際に枯れたもの、食害されたものへ補植が行われているという事が明らかになり、急傾斜地で機械化が進まない状況下でも手作業で丁寧に八角を大事に育てているように思いました。

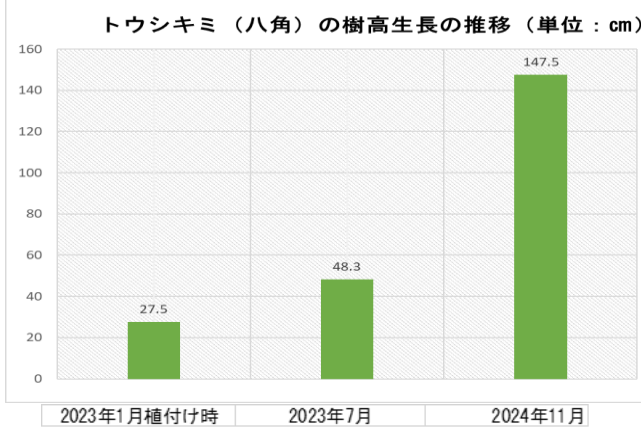
その後、第二期の事業地へ、集会場まで車で移動後、そこから先は現地の農民のバイクの後ろに乗せてもらい細い山道を走り現地に向かいました。第二期の樹種は現地からのリクエストで八角からシナモンへ変更となったそうです。シナモンは3年で葉を取って売る、木は 10 年ほどで伐採し皮を取り売られる、伐った分を植えるサイクルのように行っていくとのことでした。

現地調査後、ハザン省政府(外務局)との意見交換では、シナモンは成長すると木を伐って皮をはいてしまうため植林事業の本来の目的からすると 10 年ほどで伐ってしまうためまた植えなければならないが、植林し伐った分はハザン省が責任をもって植えていくと友好事業の緑化を無駄にしないとの話がありました。また、農民たちに意欲を持たせるために「将来的には自分たちの木になるのだから一生懸命に育てて」と農民たちと話していると…とても印象的でした。

今回の調査団の旅を通じて、ベトナムでの女性のたくましがとても印象的でした。ベトナムでは女性が働き、男はお茶を飲むと言われるそうです。路地での野菜売り、バイクに沢山の食物を積み運ぶ様子や本当に働き者という印象でした。ハノイでの女性博物館で大変な戦争の中での女性たちの働き・戦いを讀えていました。この国にはそうした底力があるなあと感じました。また、ベトナムには 40 ほどの少数民族がおり、政府が国内に呼びかけ少数民族を保護しようとする政策も行ったと聞き、日本との違いも感じました。

参加して私がどれだけの力になれたのかいささか疑問ですが、ベトナムの森林・自然環境の維持、そして経済のためにもこの植林助成事業が 1 年でも長く続くように願うところです。シンカムウ～ン

	23年		24年	23年		24年
	1月	7月	11月	1月	7月	11月
樹木番号	植付け時 (cm)	2023/7/11 (cm)	2024/11/5 (cm)	比較	2023/1比7	2023/7比11
1	27	35	102	0	8	22
2	22	54	208	0	32	53
3	27	41	161	0	14	78
4	41	76	143	0	35	67
5	21	63	132	0	42	75
6	32	54	158	0	22	60
7	22	39	151	0	17	54
8	34	53	152	0	19	56
9	31	38	113	0	7	52
10	18	30	155	0	12	62
合計 (cm)	275	483	1475	0	208	579
平均 (cm)	27.5	48.3	147.5	0	20.8	57.9
	2023年1月	2023年7月	2024年11月	2023年1月	2023年7月	2024年11月



上：調査の前にハザン省森林保護局と作業会議
下：会議後ハザン省森林保護局の前で



「草刈は3回行った。1グループ10人で、延べ20日間程度の出役を行った」「昆虫による食害もあり、補植を行ったのは全体の30%程度であった」と現況の報告も受ける。

今回も「トウシキミ（八角）の樹高生長の推移」のための調査を行った。植付けを行った200本の内、ランダムに10本を選抜し、現在（11/5）の苗長と生長量（伸長）を測定した。昨年度から16か月を経過して伸長量は58cmとなり、3倍を超える樹高に達していた。さらに、2023年1月の植付け時の苗木から平均で120cm伸び

ている結果となった。（左表参照）植林部長の説明を裏付ける結果となった。

農民からの聞き取りによると、トウシキミは樹高15m程度まで生長し、結実後9年間程度は安定的に八角・スターアニスと呼ばれる果実を实らせる。果実は中国に輸出され、中華料理の代表的香辛料の原料として取引されるとのこと。また、生薬として胃腸薬等の原料としても重宝するのだと説明を受けた。



引き続きワゴン車で、第二期事業1年目のシナモン植栽地（面積：3.5ha、総本数：10,500本）のハザン市フォンドー社ター村に移動。（外務局提供の事業計画図は等高線を省いた位置図のため、一期と二期の事業地は隣同士の位置関係だが…。どうやら、頂と沢が違うようだ…）

麓の村集落の自動車道から植林地までは、桂皮林に沿った延長約4km、道幅1.5m程の未舗装の「かよい道」を原付バイクの二人乗り（植林部長運転の後部乗車）で恐る恐る向かう。谷側の斜面が崖のような地形もあり肝を冷やす。ましてヘルメットもしていない。

現地での説明は、「2024年3月から4月にかけて地拵えというよりは、伐開に類する作業を行い整地した。昔はパイナップル畑だった場所がその後、手つかずのまま雑草や灌木等が茂るに任せ、放置された林地（耕作放棄地）であった」とのこと。

（※以下の箇条書きは、現地での聞き取り結果です。）

- ・6月に地拵えが完了し直径40cm、深さ40cmの植穴を掘りシナモンの苗木10,500本を3.5haに一斉に植樹した。
- ・既に1回下草刈りを行っており、年内にもう1回、下草刈りを行う予定。
- ・シナモンは単独ではなく、上木があったほうが良く育つとのこと。（陽光のあたらない環境に耐える陰樹という意味で理解したが…）
- ・定期的に植栽苗の生育状況を観察し周期的に有機肥料やNPK肥料を施肥する。
- ・およそ10年後、直径20cm程度に生長。樹皮を剥ぎ、収穫をする。
- ・シナモンの森で家畜（牛）の放牧を禁止するとともに、森を保護するため牛が近づく恐れのある周囲に防護柵を設ける。

・シナモンの森の保育管理を容易にするため、「かよい道」添いの樹木の枝払いや整理のための伐採を継続すると述べられていた。(簡単ではないことを承知の上で、将来のシナモンの収穫と搬出を念頭に「かよい道」の拡幅などは重要な課題である)

事前技術会議で報告された「現地農民の希望によりトウシキミから“シナモン”へ植栽樹種の変更要望」について意見交換する。言い分は、果実などの豊凶による収量への懸念と配慮、同一樹種とすることで病害虫が蔓延するなどのリスクを分散させる目的で樹種の変更を要望したとのこと。「きわめて合理的な選択だ」と称え、と、“したり顔”であった。

事業地の概観としては、補植済みで枯れた苗木は皆無であった。

植付け総本数をカウントする代わりに、仕様どおりに植え込まれているかを測定することで、苗木が事業計画のどおり“入っているか”の判定基準とした。計画では、苗間が1.5m、列間2.0mとなっている。現地で複数回計測した平均は、苗間が1.65m、列間2.0mであった。結論からいうと、苗木と苗木の間隔が計画より1割長いのは北海道国有林では上限ギリギリセーフの評価になる。その他の評価として、列間は計画どおりであること、植付けに適した南西方向の一枚緩斜面で植付け環境と条件は良いこと、「上木は残っていたほうが良い」との説明の割には、保残木が薄いことから苗木が入っていると想定し、評価は“良”とした。

最後に、植林部長が強調していたのは「外務局は下草刈りは年間2回で十分というが、地元民の財産なんだから、手間を惜しんではならん」と真剣な表情で語っていた。国籍や民族の違いを乗り越えて篤林家の矜持を垣間見た。

【現地での観察メモ】

□周辺環境(林相)について

- 植栽地の周辺は、常緑広葉樹林で主体は照葉樹。マツ類もわずかに点在している。林冠は低く、高木～低木の密度も低く、下層植生は主にシダ植物を中心とする草本が多い。
- 照葉樹林やこれに類似した森林は中国南東部からヒマラヤ中腹にかけて、東南アジア各地の山地に広くみられる。現地は正に、この照葉樹林帯に該当し、常緑広葉樹中心に構成されている。常緑広葉樹は1年以上の寿命をもった、やや硬い葉をつける。葉の表面にロウ質の層が発達していて光沢があるものが多いことが“照葉”という呼び名の由来とされている。
- 貧栄養な土壌と推測される。保育作業の一環として、定期的に有機肥料などを施肥するのは、そのためだろうと思われる。
- ハザン省の特徴的な地形である山岳地形のもとで努力が見られた。高山の谷あいと比較的緩やかな斜面はすでに水田耕作地として棚田で活用済みである。したがって残された植林地は傾斜などの条件が厳し



上：事業地まではバイク同乗で行くしかない
下：事業地でシナモンの生育を調査する



下：記念植樹した二期事業地の模様



くなることは容易に想像できる。それでも、ふたつの事業地とも日射(陽あたり)を考慮して南西斜面を確保しようとする努力が見られた。とりわけ第Ⅰ期事業地は、高山の中腹に位置し、谷も深い斜面にトウシキミを植栽している。昨年度の視察の際に、段々畑のように整地し植栽をするしかないと見立てていた箇所を通常の整地を行い、すでに植栽されていた。現地農民の努力を伺うことが出来た。(難儀したろうと想像する)

□植栽地の状況について

- 昨年度、一部見られた苗木の頭が刃物で切られたようなヒューマン・エラーは、見られなかった。下草の繁茂と下草刈り回数が増えることで損傷が増す可能性があることから注意を要する。ただし、苗木の生長に伴い視認できれば低減もする。
- つる性木本類(つる性植物)の繁茂も確認した。トウシキミが順調に定着し樹高生長を伸ばすのと歩調を合わせ下層植生、つまり排除対象の下草も本来の多様性を回復しつつあることが確認できた。目を凝らして観察していると、トウシキミの樹皮にらせん状の模

様を発見。隣接するトウシキミには下草刈り時にキッチンと切断されても、干からび残った、つるがらせん状に残っていた。鎌田副理事長曰く「こうやって絞めつけるんだ」とおり、あなどれないのと同時に、丁寧な下草刈りが行われていることを確認した。

○植栽箇所を整地(地寄せ)する際に、有用な樹木を残す選択がされていた。天然更新のマツ(中国名「沙樹」、苗長約40cm)が保残されており、将来に向け針葉樹を含めた多様な樹種で森林を構成することは理想的である。

○昨年度にはなかった植栽地に通じる作業道の入り口に、人の背丈を超える3m程度の鋼製ゲートとチェーンが設けられ、その横には“NO FIRE“の赤い立て看板が設置され管理、警防対策が徹底されていた。



15時より、カウンターパートであるハザン省外務局トアン副局長他2名と協議。

- ・今回のプロジェクトは第三期までを計画していた。助成金事務局の日中友好会館より2024年度助成金公募中止の連絡があり中断となった。今年(2024年)は、第一期事業が2年目を迎え、第二期がシナモンの植栽を行ったばかりの1年目であるが、それぞれの事業3年目まで下草刈りなどの保育作業は行うこととなると説明。
 - ・第二期事業の遂行状況報告書に記載されている植栽本数を正確に記載してもらいたい。
 - ・日本の助成金事務局に提出する領収証などの書類整備・作成を急いでいただきたい。
- 以上の議題で協議が行われた。

11月6日(水)

9時頃、リニューアルオープンしたハザン市博物館を見学。ハザン省は熱帯モンスーン地域に位置し年間平均気温が21.6℃～23.9℃、平均湿度が85%と天候の説明がされていた。

地形的には、省の北部は高山、山岳地帯。省南部は幅広い森林地帯を有しており、総体的には山岳地方の特徴的な環境を呈しており、山の斜面に階段状につくられた、曲線を描く水田である棚田の風景が大型スクリーンに映し出され映像が印象的であった。

その後、ハノイ市に向け出発。6時間30分かけ移動、夜のはじめ頃に到着する。

11月7日(木)

10時より、ベトナム友好委員会連合・ベトナム日本友好協会(VJFA: vietnam-japan friendship association)のグエン・フー・ビン会長夫妻(元駐日ベトナム大使)と懇談する。(ハザン省外務局は、ベトナム友好委員会連合の「省レベル友好委員会」を兼る)

懇談では冒頭、鎌田JVPF副理事長より4月の森林火災、11月の台風11号による水害及び土砂被害に対し



ベトナム日本友好協会のグエン・フー・ビン副会長、オアイン事務局長に調査報告する

お悔やみの言葉を申し上げた。つづいて今回のプロジェクト全体像である「ハザン省日越友好植林事業」と昨日までの視察団調査の概要と意義が報告された。ビン会長からは、お礼の言葉とともに、特に地元民を大切にしているプロジェクトに対し感謝の気持ちが述べられた。

さらに鎌田副理事長から、今回のプロジェクトは第三期までを計画していたが、助成金事務局の日中友好会館より助成金公募中止の連絡があり中断となっている旨の経緯を説明した。ビン会長からは、昨年の日越外交樹立50周年で交流関係が促進されているし、日本の総選挙を経て日本政府にも変化が生ずるのではないかと期待している、と述べられた。終始和やかな内に懇談を終えた。

11月8日(金)

早朝5時30分ホテルを出発。ノイバイ国際空港発8時40分のベトナム航空機で帰国の途に就き、羽田空港15時05分着。全員無事帰国。

最後に、各種の事前手配と視察の同行いただいた、NPO法人日本ベトナム平和友好連絡会議副理事長鎌田篤則さん(IFCC交際友好文化センター理事長)、通訳・現地案内を務めていただいたチャン・チ・ツエットさん、ホアン・チ・ゴックさんに紙上をお借りして心からの御礼を申し上げます。

記:杉村 政彦、2024年12月20日

【本プロジェクト中止のご報告】

- ・日中友好会館助成の本事業の公募が2024年度から中止となったため、計画していた第三期事業を停止せざるをえなくなりました。これによって、JVPF主催の《日越緑の架け橋》プロジェクトはいったん区切りをつけます。
- ・よって、本JVPF会報別冊『日越「緑の架け橋」』は本号が最後となります。
- ・関係者の皆様のこれまでのご協力に御礼申し上げます。(KA)